

いわみざわの民話

第9回

「いわみざわの民話」は、平成9年に「いわみざわの民話」刊行委員会が発行しました。

逃亡囚物語

北海道行刑史をみると、樺戸集治監では、明治18年に大集団の脱獄事件があったようである。集治監の創設当時は、本州の政治犯がほとんどで、それがこのころには極悪犯に変わっているようである。従って警備の巡査はピストルの携行を許されている。逃走した囚人はおおかた札幌付近の村落に出没して、強盗や窃盗はもちろん、暴行、脅迫といったあらゆる暴虐の限りをつくし、そのために住民は戦々恐々として、昼でも戸窓をこざして外出を止めたともいわれている。

集団の多くは札幌近郊に向かったものの、中には脱落したり、方向を転じたりして、行刑史の記録では、全部が逮捕されたことにはなっていない。その行く末はいろいろ取沙汰されているのも、もっともな話である。追跡に加わった刑事の中には、野原の足跡をたどって、あるところまで、糞便を糞

見している。その大胆不敵なやりかたに舌を巻くこともあったというが、こんな奴はとうていつかめぬとして追跡をやめたということである。空腹のために野たれ死にしたものもあつたそう。

そこで樺戸集治監は、岩見沢に近いことから、逃亡囚人についてつぎのような物語がある。この囚人は例の集団逃亡囚の1人であつて、実刑は重かつたが、それは飽くまでも誤つての殺人で、故意でなかつたということである。彼は巧みに警戒網をくぐりぬけ、ポツンとさびしい軒家の民家に辿り着いた。もちろんその服装からしてもこれが囚人と大体わかつておびえていると、簡単に自分の罪状の真偽を語って、食べ物を乞うたということである。この家の主人は、なかなか落着いた人で、食べ物を与えて、あなたは逃げ場に困っているのだから、これから行く先は何処何処がいいでしょう。そこはアイヌ部落で、そこならばあなたを匿ってくれるに違

ない、と教えてくれた。囚人は深く感謝して、身をひるがえしたということである。

そこは通称ポントネといわれるいまの東山町で、岩見沢ではこの地にアイヌ部落があつたといわれているところである。アイヌの人情は純粹であつた。たとえ言葉が通じなかつたとしても、囚人の真意は通じたものようである。ということは、それから何年かたつて、何処からともなく、逃亡囚のうわさが町に流れた。それには、アイヌ部落にそれらしいのがあるということであつた。だがそれはあくまでも町のうわさにとどまつた。

もしも仮にその囚人がアイヌ娘と結婚し、子どもがで、あれから最早や伝説のように風化してしまつているとしたら、この逃亡囚の罪をひとはいまも憎むであろうか。これもひとつの物語にしか過ぎなくなっている。

第10回は「イチチャン物語」を紹介いたします。

発行・編集 岩見沢市総務部市民活動課

ひとの動き 平成22年10月31日現在

●住民基本台帳 人口 総数 90,334人(前月比 -31)
男 42,441人(前月比 -30)
女 47,893人(前月比 -1)
世帯数 42,354世帯(前月比 -10)

岩見沢市役所

☎068-8686 北海道岩見沢市鳩が丘1丁目1番1号
☎0126-23-4111 ㊚0126-23-9977
ホームページ <http://www.city.iwamizawa.hokkaido.jp>
▶救急当番医ガイド ☎0126-23-5153
▶消防テレホンガイド ☎0126-24-0119